お盆（盂蘭盆会）

釈尊の弟子・目連尊者の母が仏法によって餓鬼道から救われたという故事に由来するとされる法要。日本では、先祖供養のための仏教行事という意識が強いが、浄土真宗では、故人を偲びながら、自らが仏法を聴聞する機縁としてつとめられる。

三上　章道
初めてのお盆……1
深水　健司
「チョウモン」って何？……11
岩田　真美
「いのち」の輝き……21
北塔　光昇
浄土真宗とお盆……31

本文中、『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』と略記しております。

初めてのお盆

三上　章道

変化するお盆の風習

私は、昭和三十八（一九六三）年三月、高校卒業式の数日後に鹿児島本線大牟田駅（福岡県）で、集団就職列車に乗る多数の同級生を見送りました。この列車は、鹿児島を出発して熊本や博多など途中の駅で、首都圏・中京圏・近畿圏の三大都市圏へ就職する中学・高校の卒業生を乗せて走る臨時列車でした。集団就職列車は、高度経済成長の始まりである昭和二十九（一九五四）年に、青森から上野まで走ったのが最初です

が、昭和五十（一九七五）年までの二十一年間、全国各地から都市圏を目指しました。その後は、三大都市圏の大学に入学した大学生の多くが地元に帰らず、そのままそこで就職しました。そしてその人たちは家庭（核家族）を持ちました。現在、三大都市圏（面積は全国の二五％）に七千八百万人（人口の六三％）の人が住んでいます。

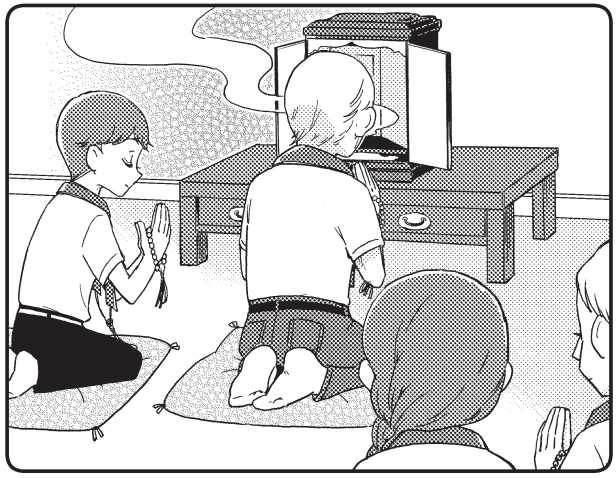
昭和四十年代から平成の中頃にかけて、お盆になると三大都市圏で家庭を

持った人たちの多くは、子どもを連れて故郷へ帰り、親、兄妹や親戚、友人たちとの再会を楽しむとともに、先祖のお墓にお参りする「風習」ができました。新幹線・飛行機・高速道路・フェリーなどは、故郷（親元）へ往復する人たちで溢れました。毎年、お盆前後の新聞には「民族の大移動、都心はガラガラ」という見出しが躍っていました。その後、その人たち（核家族一世）の子が家庭（核家族二世）を持ち、その多くも三大都市圏に住みました。二世の人たちはお盆に両親の故郷へ行く機会が少なくなり、「お盆の風習」は変わっていきました。そして、令和二（二〇二〇）年からは新型コロナウイルスの感染拡大で、家族の形態はさらに大きく変化しています。

ご本尊「いちょう」を

私は平成二（一九九〇）年、四十五歳のときに滋賀県大津市で後継住職を探しておられたお寺に家族四人で入寺しましたが、三年前のお盆にこんな経験をしました。

八月初め頃、地域の活動で知り合った方から「初盆のおつとめをお願いしたい方がいるのですが……」という相談がありました。「初盆」とは、自分と関わりの深い人が亡くなった後に初めて迎えるお盆のことです。依頼されたAさんに電話をすると七十歳代の男性で、「昨年秋に妻を亡くしたのですが、九州の実家は浄土真宗だったと思いますので……」とのことでした。Aさん宅を訪ねて部屋へ入ってみると、小机の上にお骨箱と写真と一輪挿しがあるだけでした。経緯を聞きました。



「大学を卒業後、大阪の会社へ就職、結婚した。子どもは独立して、孫と東京に住んでいる。妻が亡くなったときは、駆けつけた子や孫と一緒に葬儀場で一晩過ごして、翌日火葬していただいた。お盆が近づき、地域の方から初盆のおつとめをしていただくお寺を紹介すると言われたので、お願いしました」

懐中名号を安置して、お子さん、お孫さんとともに「正信偈」をおつ